

話題提供

社会福祉法人紫野の会 東京都地域生活定着支援センター統括センター長 赤平守氏

ご紹介いただきました東京都地域生活定着支援センターのセンター長の赤平と申します。

【地域生活定着支援センターとは】

このパワーポイントの画面で、日本最大の刑務所、府中刑務所が映っている。この刑務所の中には、多くの障害を持っている方、またかなり高齢になって地域生活が大変な状況になっている人たちがたくさんいらっしゃる。そういった人たちは、この刑務所から一旦出たのはいいけれども、その後生活することが本当に困っている。そういった人たちを対象として、新しい地域生活を支援するというのが地域生活定着支援センターということになる。

【地域生活定着支援センターの対象者】

府中刑務所は日本最大の刑務所で、今、約2千数百人の受刑者がいる。刑務所の中には養護工場という、知的障害を持っている人だけが働く工場がある。その工場の受刑者を対象に、2週間に1回、福祉講話という時間を設けさせていただいている。去年から始め、40回を超える回数やっている。そこで使わせていただいたものも利用しながら、お話をさせていただこうと思う。

これはアンパンマンのスライド。原作者やなせたかしさんは亡くなったけれども、このアンパンマンの主題歌に、こういった歌詞がある。「なんのために生まれて、なにをして生きるのか、答えられないなんて、そんなのはいやだ！」と、「なにが君の幸せ、なにをして喜ぶ、わからないまま終る、そんなのは嫌だ！」というすごい深い歌詞がある。

この刑務所の中にいる、私たちが対象としている人たちは、この「そんなのは嫌だ！」ということを書けない人たち。どういうことかということ、なにをして生きるのか、答えられないままで、なにをして喜ぶのか、わからないまま終わってしまう、そういった人たちが刑務所の中にたくさんいらっしゃる。そういう人たちを支援するのが定着支援センター。

そういった人たちが、その対象となるのかということをご説明しますが、高齢者、もしくは障害を持っていることが認められていて、矯正施設、刑務所や少年院を退所した後、帰る場所がない。そして、矯正施設を退所後、福祉サービスを受けなければ、また刑務所に戻るしかない、そういった人たちが対象となる。

特別調整の対象となることを本人が希望しているということ。そして、調整の実施のために必要な範囲内で、個人情報や公共の保健福祉に関する機関に情報提供することを本人が同意していること。これがなければ、この調整はスタートしない。本人が希望していて、なおかつ同意していることが大事なポイントとなる。

【東京都地域生活定着支援センターの開設】

それでは、東京都地域生活定着支援センターがどういうものであるか説明させていただく。

平成23年の5月24日に開所。この事業自体は、平成21年7月に国事業としてスタートしたが、東京都は全国で41番目と非常に遅れた。

この事業は平成18年、厚生労働科学研究で、罪を犯した障害者の地域生活支援に関する研究班が3年計画でできた。私もその研究員の1名だったが、そのときは本当は東京が一番最初に作らなければいけないと声を大にして言った。

東京には府中刑務所のような大きな刑務所もある。そういった事業を始めれば、東京にどんどん犯罪者が流入するのではないかとといったような懸念が関係者から出て、遅れてしまったという経緯がある。

【東京都地域生活定着支援センターの対象者】

25年10月末時点で、160人が特別調整の対象となっている。これは非常に多い数字。県によっては、年間数人だが、東京都の定着支援センターは、今年度だけに限れば、年間100人を超えるかもしれないというペースで、この調整を行っている。

次に支援協力。府中刑務所に入っていたとしても、その人は全部が東京の人ではない。全国いろいろな所から入ってくるので、東京から他の県に帰る人、またその逆に網走刑務所などさまざまな刑務所の

人たちが東京に戻りたいと言っていたりする。定着支援センターは47都道府県全てに設置されているので、そういったところと支援協力をしている。

対象者は、15歳から90歳まで。いろんな人たちが、この刑務所に入っている。最多は「44入」と書いてある。「44入」というのは、前科何犯ではなく、44回刑務所に入ったということ。どういふことかという、短い刑期が何度も重なっているということ。そして同時に44回、裁判を受けてきているということ。裁判官は44回も同じ裁判をやっていて、おかしいと思わなかったのかなというのが正直なところ。

罪名はほとんどが窃盗、詐欺。詐欺とは無銭飲食。最近では放火犯であったり、性犯罪、覚醒剤、殺人というケースもある。

東京の特徴としては、単独の要素というものはほとんどない。高齢プラス障害、障害も知的と精神両方であったり、高齢で知的であり精神、または認知、これが全部入ってきている。本当にさまざまな生きにくさというものを抱えながら生きている、刑務所生活を送っているという人たちがいるというのが特徴。

また、東京には関東医療少年院という少年院、八王子市に八王子医療刑務所という刑務所がある。例えば静岡の刑務所で非常に重い病気になったとすると、八王子医療刑務所に移される。もし、刑期の間に治療が済めば、また静岡に戻る。それが東京には二つあるので、ほかの県より複雑なケースがたくさんある。

【生きづらさを抱えながら】

満期出所の約半年前から面接をする。面接によって、ニーズはどんどん変化していく。

刑務所では、「はい」としか言えない。「ノー」という言葉はない。「ノー」と言ってしまうと、刑務所の中では懲罰を受けることになる。だから、最初の面接から、本人が本心を言うということは、まずあり得ない。面接を重ねながら、本人の固まった心を溶かしていくということになる。

先ほど生きにくさという言葉を使った。50年も刑務所に入っている人、10回、20回と同じことを繰り返す人は全く反省がないと思われるかと思うが、実際にはこの生きにくさというものが連鎖している状態にある。つまり、障害だけが生きにくさを作っているわけではなく、そこで起こる不安感であったり無力感や貧困。

刑務所は、窃盗では300円の物を万引きしたりとか無銭飲食で、それで2年、3年入れられるというケースがある。私が知っている限り、さい銭泥棒で5円取ったら途中で見つかってしまい、3年入れられた人がいる。

例えば1年の刑期で出てくる場合でも、刑務作業でもらえるお金は、せいぜい1万円ぐらい。1万円持って出所して、帰る場所もない人がどうやって生きていくのか。当然、そのお金はあっという間になくなる。刑務所の満期出所は曜日が決まっていて、平日だけ出るわけではない。休みの日に出たら、大変なことになる。今年の正月休みは28日からずっと。生活保護を申請したくても9連休、この間どうやって暮らせばいいのかということになる。そういった方に対する支援をするということ。

この貧困の状態、絶望感、疲弊感、そしてさらにはかなりの方が差別やいじめを非常に多く経験している。私たちの対象者の7割はIQが70以下の人。しかも、98パーセント中卒以下。学校に行かないから犯罪というわけではない。行けない背景を抱えながら、ずっと生きてきている。そして、その結果、孤立状態になっていく。

支援してくれる人がいたら、44回も同じ裁判を受ける必要はない。誰も助けてくれない。そういった意味での閉塞感、自己否定。こういったものが相まって、逃げられなくなっていく。どんどん生きづらさが高まっていくという状態。

このスライドの島倉千代子さんも言っている。まさに「人生いろいろ」。罪を犯したからという一色ではない。人それぞれ本当に違うということ。

【同じ人間という視点】

障害者、犯罪者である前に、同じ人間だという視点、これがなければこの人たちは生き直しができない。また、他人と違うことより同じことのほうが多いはず。例えば自閉症で非常に重く、強度行動障害と言われる人いる。他害行為、また自傷行為がすごいという人もいる。こんなことを毎日やっていた

ら、あっという間に死んでしまう。そうではなく、普通に生きている時間のほうが、圧倒的に長いはず。そこに着目しなければいけない。この人は罪を犯したという視点、障害というフィルターと犯罪というフィルター両方から見たら、もうこの人は見えなくなる。そうではなくて、自分とどこが共通項なのか、そこを見ていかなければ、私たちのこの支援、特に定着支援というのはなかなか成り立たないと考えている。

【手段と目的の逆転を見過ごさない】

そして、手段と目的の逆転を見過ごしてはならない。再犯しないことを目的にしましょうという方々が多いが、私はそうではないと思っている。再犯するかしないかは結果。本来の目的は、生きにくさを抱えたまま生きてきたこの人たちが、本人の中に新しい人間関係ができて、新しい生活ができて、その生活を手放したくないという状態を作らなければいけない。それが目的であって、その結果として、もう刑務所には行かない、再犯しないということが本来の姿でなければならないと私は考えている。

再犯させないのは簡単。管理を強めればいいだけ。となれば、本人からすれば、また新しい刑務所に来てしまった。今回は無期だ。いつ出れるかわからない。そんな福祉は必要ない。そうではなく、本人の中に新しい生き方が芽生える、そういったものが必要ではないかと考えている。

【情報を正確に捉える】

そして支援者、相談支援の方々がたくさんいるが、情報をきちんと捉えるということ。刑務所から出てくる情報は、本人の悪いことしか書いていない。何度捕まって、こんな罪を犯して、そういった事実が並べられている。10回刑務所に入ったけれど、本当は根はいい人ですなんてことは書いていない。その情報の裏側にあるものを、ぜひ読み取っていただきたいと考えている。そのためには皆さんの理解力を高めていく。そして、正しい情報を理解して、実現できる技術、これが三種の神器ではないかと考えている。

【エンドレスな支援】

法務省の関係者や矯正施設の職員に言われた。私たちの支援は、刑期が終わればおしまい。保護観察も決められた期間で、それが終わったら、私たちはもう手出しできない。それに比べて福祉という世界は、エンドレスだと聞きびっくりしたと。

これは本当にすごいことだと思う。その人が生きていく上で、エンドレスな支援、それをどう組み立てられるか、これが本当に大きなテーマではないかと思いつつ、毎日過ごしている。